https://www.wako.ac.jp/cooperation/research-center/gender.html

vol. 33
2022年3月発行

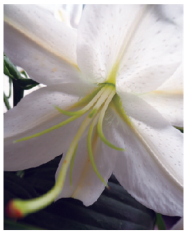
GF通信
ジェンダーフォーラム
GENDER FORUM PRESS

井上輝子先生追悼号

和光大学 ジェンダーフォーラム　〒195－8585　東京都町田市金井ヶ丘5丁目1番1号　和光大学ジェンダーフリースペース（G112）　TEL 044－989－7777 内線4112　gen-free@wako.ac.jp

MEMORIAL

特集：井上輝子先生 追悼
― 足跡と思い出 ―



和光大学で日本初の女性学講座を開設され、本学のみならず日本のジェンダー研究および教育を牽引されてきた井上輝子先生が、２０２１年８月１０日に長逝されました。

井上先生は、ジェンダー・スタディーズ・プログラムやジェンダー・フォーラム設置の立役者であられ、また長らく運営にも携わられて和光大学のジェンダー教育を中心になって率いてこられました。井上先生の多大な貢献への感謝の思いと、先生が築き上げられた業績に心からの敬意を表したく、『GF通信』本号では井上先生の追悼特集を組んでみました。先生の足跡をたどりながら、在りし日の先生を思い起こす縁となりましたら幸いです。

井上 輝子　INOUE teruko

（1942年3月27日～2021年8月10日）

作成：阿野理香

❁女性学誕生まで

1960年3月	都立九段高校卒業。在学中は高校初の女性生徒会長を務め，マスコミ取材を受ける。
1960年4月	東京大学教養学部文科Ⅱ類に進学する。
1970年11月	ウーマン・リブの大会に参加する。
1971年3月	東京大学大学院社会学研究科博士課程単位取得満期退学
1971年夏	リブ合宿（長野県信濃平）に参加し，松井やより（朝日新聞）から，アメリカの大学での Women' s Studies について聞く。
1973年夏	アメリカに視察旅行。Women' s Studies の資料収集と講座を開設した教員にインタビューを行う。
1973年秋	アメリカから、帰国後に「婦人問題懇話会」に参加する。 賀谷恵美子とともに　Women' s Studies　に「女性学」の訳語を当てる。
1974年4月	和光大学で，日本初の女性学講座である「女性社会学特講」を開設し、担当した。

❁社会的活動

1983年6月	国立婦人教育会館女性学講座企画委員（~1985年8月）
1986年9月	川崎市女性問題推進協議会委員（→1989年7月副会長~1992年11月）
1989年4月	文部省社会教育審議会専門委員・教育映画等審査分科会（→1991年8月~1994年11月、生涯学習審議会専門委員）
1992年12月	川崎市女性行政推進協議会会長（~1996年5月）
1994年8月	国立婦人教育会館「社会教育における女性学教育の内容と方法に関する調査研究プロジェクトチーム」座長（~1997年3月）
1999年12月	川崎市男女共同参画センター運営委員会委員長（~2001年12月、2004年9月~2008年8月）
2002年2月	川崎市男女平等推進協議会会長（~2004年3月）
2003年4月	東海ジェンダー研究所理事（~2019年）
2004年7月	川崎市制80周年記念特別賞受賞（川崎市の男女平等推進行政への貢献）
2012年8月	「田中寿美子さんの足跡をたどる会」を設立し、代表（~2021年）
2019年4月	東海ジェンダー研究所評議委員（~2021年）

<井上先生とフェミニズム>

▲『行動する女たちの会　資料集』の1巻「解説」を執筆した(六花出版 2015)

▲『何を怖れる』(岩波書店 2014)

▲『何を怖れる』について講演する井上先生
同名の映画にも出演した　(2015.11 和光大学)

▲ 友人・樋口恵子さんとブックトーク(2019.6)

▲「暮しの手帖」の足跡を辿るフィールドワーク(新橋・銀座) (2017.11)
定年退職後、「GF読書会」などで社会人教育に尽力された。

❁ 略歴

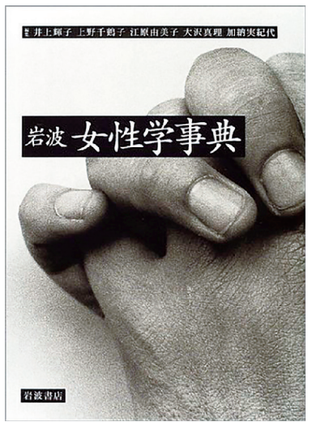
1970年4月	立教大学法学部助手
1973年4月	和光大学人文学部助教授
1981年4月	メキシコ国立大学院大学客員教授(~1982年3月)
1984年4月	和光大学人文学部教授
1990年10月	同教務部長(~1994年)
1996年4月	同人間関係学部教授
1997年10月	同図書館長(~2000年9月)
2001年4月	ロンドン大学教育研究院(~2001年11月), メキシコ国立大学院アジア・アフリカ研究センター(~2002年1月), ハワイ大学マノア校(~2002年3月)各研究員
2002年4月	和光大学人間関係学部人間関係学科長(~2003年3月)
2003年4月	同人間関係学部長(~2006年3月)
2007年4月	同現代人間学部教授, 同現代人間学部現代社会学科長(~2009年3月)
2007年4月	同大学ジェンダーフォーラム代表(~2009年3月, 2010年4月~2012年3月)
2012年3月	定年により和光大学を退職
2012年4月	同大学名誉教授
2012年4月	和光大学GF読書会主宰(~2021年8月), 同大学オープンカレッジばいでいあ「女性学講座」担当(~2021年)

❁ 研究活動

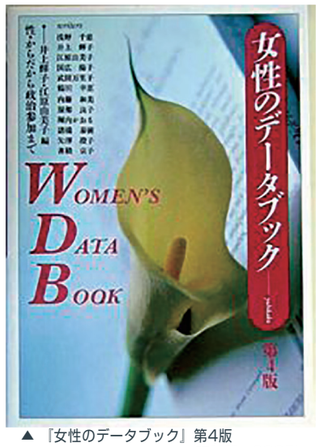
1970年	日本社会学会会員, 日本新聞学会(1991年日本マス・コミュケーション学会と改称)会員, 日本出版学会会員(1990~1992年度常任理事)
1971年	婦人問題懇話会会員(1973~2001年閉会まで幹事)
1974年	女性社会学研究会設立(~1978年)
1978年	女性学研究会会員(2009年閉会まで, 運営委員等)
1979年	日本女性学会会員(1992~1995年度, 2006~2007年度, 代表幹事)
1984-89年	国際共同研究「日墨米女性雑誌研究比較研究」
1990年	第11回日本出版学会賞受賞(編著『女性雑誌を解読する』)
1995年	北京世界女性会議 NGOフォーラムで, ワークショップ開催
1996年	国際シンポジウム「カルチュラル・スタディーズとの対話」 Media,Gender and Sexuality 司会
1999年	コロンボ大学大学院で講演 (日本の家族, 日本の女性雑誌)
2000年	Women's Studies in Asia2000 (ソウル梨花女子大)で, 基調講演
2001-02年	イギリス, メキシコ, ハワイで研究交流
2009年	英国、エジンバラ大学のセミナーで、「日本の少子化問題とジェンダー」について報告
2018年	メキシコ、エル・コレヒオ・デ・メヒコの国際シンポジウム(平等・解放・エンパワーメント ―メキシコと日本の女性の130年の歩み)において「日本のフェミニズムの歴史的展望」について報告

<代表的な著作の一部>

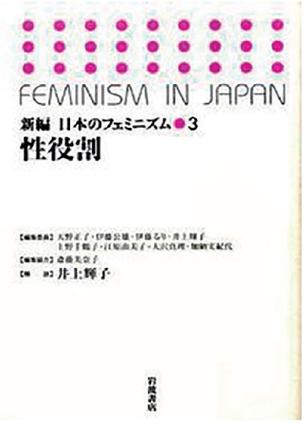
▲『女性雑誌を解読する』(垣内出版 1989)



▲『岩波　女性学事典』(岩波書店　2002)



▲『女性のデータブック』第4版 (有斐閣　2005)



▲『性役割』

▲『表現とメディア』

「新編　日本のフェミニズム」(岩波書店　2009-11)

▲『新 女性学への招待』(有斐閣 2011)

▲『日本のフェミニズム―150年の人と思想』最後の著作(有斐閣 2021)

Memorial

追悼　高等教育機関における ジェンダー教育の発展に尽くされた 井上輝子先生

10 年前、井上輝子先生の後任として和光大学に着任しました。引き継ぎ業務のために先生の研究室を訪問し、初めてお目にかかったのは、手元の記録では 2012年2月17日です。先生は、研究室の引っ越しのために荷物を整理している最中でした。「食器棚の引き受け先がないのだけれど、良かったらどう？」とおっしゃり、私は食器棚と一緒に研究室を譲り受けました。研究室の広さや床の色によく合う、あずき色の食器棚です。この上に置いた電気ケトルでお湯を沸かしてお茶を入れるとき、10 年前のことをふと思い出します。自分の専門のジェンダー／セクシュアリティや社会学に関する科目を担当し、社会に関心のある学生たちと学べる幸運に、とても高揚していました。

私が和光大学で働き始めたとき、すでに、現代社会学科や共通教養教室のジェンダー関連科目は充実しており、図書館もこの規模の大学にしては相当の数の関連図書を所蔵していました。ジェンダー教育を担う学内機関「ジェンダー・フォーラム」があり、そこには先生を慕う人々の交流がありました。先生が築いたこれらの遺産は、今でも学外から注目される和光大学の特徴の１つとなっています。

ジェンダー教育のための土台作りをどのように進めていったのかについては、先生が 2020年7月28日になさったオンライン講演で知ることができました（「和光大学ジェンダー・フォーラム――発足過程とその後の展開」青山学院女子短期大学総合文化研究所主催）。この講演では、先生が 1974年に女性学講座を開設し、学内でネットワークをひろげ、ついにはジェンダー・フォーラム創設に至った経緯やフォーラム創設後に取り組んだ活動を、当時の写真や動画とともにご紹介くださいました。学生を巻き込みながら、どのように多岐にわたる活動を展開してきたのか、その方法と精神を学ぶ良い機会になりました。

この後、先生とゆっくりお話をするチャンスは訪れませんでしたので、今となってはこの講演が遺言のように思えます。先生は講演で、高等教育機関におけるジェンダー教育が果たす役割や課題を明確に示されました。それらをしっかりと受け止め、少しでも貢献できるように地道に取り組んで参ります。先生から学んだことの一端を記して感謝の言葉とさせていただきます。井上先生、どうもありがとうございました。

（杉浦　郁子・人間科学科）

▲ 井上先生に譲っていただいた食器棚

Memorial

井上輝子先生を偲んで

井上先生と学部を越えて親しくお話させていただくようになったきっかけは、和光大学総合研究所の共同研究だったかと思う。私が和光大学に専任講師として着任して 2 年目に船橋邦子先生が代表を務める共同研究「ウーマンリブの思想と運動」（2004年度）に、そして翌年からは「ウーマンリブの拓いた地平」（2005～2006年度）にも加えていただいたのである。

私にとってウーマンリブは新たなテーマだったが、個人的には進路選択や自立についての考え方に大きな影響を受けたことは自覚していた。また、ミニコミ誌を主とした一次資料の解読や活動家に対するインタビューといった調査を学内の研究者でチームを組んで行うことは学びも多く、楽しかった。ウーマンリブの活動家・実践者へのインタビューのため静岡、名古屋、京都、大阪などに３人で出張したのはよい思い出である。聞き取り先ではどこでも懐かしい面持ちで迎えられ、遠来の仲間との歓談という雰囲気で進められた。時には、世代が大きく異なる私（1970年生まれ）に対して教え諭すような方もいらっしゃったが、井上先生は世代間ギャップからウーマンリブを捉え返す、あるいはジェンダーにまつわる運動と研究の来し方を相対化するという姿勢でおられた。和やかなやり取りの中にも、鋭い批判の目を常に光らせ、機会を捉えて議論や行動を起こす。歳を重ねた活動家たちのこうした構えや雰囲気を、井上先生ご自身もお持ちであった。いずれにせよ、井上先生が長年にわたって築いてこられた信頼関係があってこそ、ウーマンリブという「生き方」に挑戦してきた女性たちへのインタビューが成立したのだと思う。

2007年には「ジェンダー・フォーラム」が新設され、井上先生が初代代表を務められた。当時、私も一委員としてかかわり、月一度の長時間にわたる会議、イベントの企画・運営、活動の拠点であるジェンダー・フリースペースの整備や運営などに汗を流したことを思い出す。2012年春に定年退職なさってからも事あるごとに親身に相談にのってくださり、書き物をお送りすれば必ずコメントや励ましの言葉をいただいた。本当に感謝している。

先生は近年も「オープン・カレッジぱいでいあ」の講座やジェンダー・フリースペース（GFS）での催し、読書会のためによく来学なさっていた。そんな時、教員サロンに顔をだすとおしゃべりに花が咲くのが常であった。今も教員サロンの前を通るたびに、「あら、長尾さん！」と井上先生の朗らかなお声が聞こえてくる気がしてならない。

謹んでご冥福をお祈りいたします。

（長尾　洋子・総合文化学科）

Memorial

今だから思い出したい 女性雑誌研究会

僕が和光大学に着任した 2015年度には、井上輝子先生はすでに退職されていましたが、ジェンダー・フォーラムを通じてお世話になりました。GF読書会（ミニフィールドワークも含む）を精力的に主導されている姿と人を惹きつけてやまないカリスマ性に脱帽したものです。ばいでいあ講座をご担当されていたこともあって、何度も新百合ヶ丘駅～大学間の電車・学バスでお話させていただいたことも忘れられません。ただしこの追悼文集へ寄稿するにあたって、僕がまずオマージュとして「掘り起こしたい」と思ったのは女性雑誌研究会です。このインフォーマルな研究会は、1970年代に雑誌分析に着手していた井上先生が、メキシコ(サバティカルの滞在先)から帰国した後の 1983年に有志とともに立ち上げたもので、主たる研究成果として『女性雑誌を解読する――COMPAREPOLITAN　日･米･メキシコ比較研究』(垣内出版、1989年)があります。女性雑誌と時代状況の関係性はもとより、メンバーたちが地道に解析した膨大な雑誌の紙面構成比率データは、今となっても多くの学びに満ちています。また海外との比較という点は、僕が専門にする文化人類学にも通じるところです。

僕は女性雑誌研究会のメンバーではなく、その成果で勉強させてもらった一人にすぎません。かつて僕は地方の大学（非常勤講師）で「若者とジェンダー」という科目を担当したとき、知らず知らずのうちに女性たちのハビトゥス（行動や知覚を方向付ける心的性向）を構築していく言説の群れとして、女性雑誌を取り上げたのです。その際、この分野の研究史・先行研究として、女性雑誌研究会の意義や系譜を論じたことは言うまでもないでしょう。しかし時が経っても、なぜかこの研究会が頭から離れないのです。女性雑誌研究を語るうえで欠かせない存在だから……というだけではないのです。

『女性雑誌を解読する』には、ＧＦ読書会とも重なり合う印象的な「マニフェスト」が表明されています。女性雑誌研究会は諸橋泰樹氏の『雑誌文化の中の女性学』(明石書店、1993年)をはじめメンバー個人の研究成果を生む母胎ともなりましたが、井上先生は何よりも「この研究会の活動の軌跡自体が、女性学という新しい学問の組織づくりの一つの実験として意味をもっていた」と述べています。その実験とは、研究会にプロの研究者だけでなく、志高い「素人」メンバーも多く含まれていたことを指しています。しかもそこでは、専門家と「素人」の境界線／役割分担は固定されていなかったというのです。先生曰く「研究会内部に専門的能力に応じた役割分担をはかった方がより能率的で生産性が上がったかもしれない。けれども、それはしたくなかった。女性学とはそういうものであってはいけないと、私は考えたからである」。そこには「研究というのは、本来、特別の訓練を受けた専門家のみに独占されるべきではない。とくに女性の視点や日常感覚から、従来の学問を問い直そうとする女性学は、素人の日常世界と地続きのものであってよいはずだ」という強い信念があった。専門家と市井の人々がともに学び合い、試行錯誤しながら「何か」を生み出していく女性雑誌研究会の活気に満ちた情景を、羨望をもって夢想してしまうのは僕だけだろうか。

（馬場　淳・総合文化学科）

◀『女性雑誌を解読する』

Memorial

井上輝子先生を偲ぶ

井上先生と初めてお話したのは、拙論を収めた著作を恵送した時に頂いたご返事だったように記憶する。同じジェンダーに関わる研究をするといっても、先生は社会学、私は文学、とアプローチの仕方も方法論もまるで異なる。しかも井上先生クラスの大御所になると寄贈本は山ほどあるはずで、本当に読んでくださる方はあまりいない。しかし先生はきちんと読まれたうえで、異分野の私の書くものを受け入れて面白がってくださった。ご高名な先生にどう受け入れられるのか少々緊張していた私は、その誠実さと心の広さ、暖かさに大いに感動したものである。

井上先生の人となりについて思いを巡らすと、この「誠実」という言葉に尽きるように思う。私がジェンダー・フォーラム に関わったときにはすでに井上先生は退官されていたので、接した機会はさほど多くはなかった。その多くはない記憶を辿るに、井上先生は、いつでも丁寧で誠実な態度で接してくださった。ゆっくりした口調で、相手の人間性をしっかり受け止めながら話をされる。お洒落がお好きで、アクセサリーか何かにも反応されて「あら、これいいわね」なんていうこともおっしゃるときは失礼ながら少女のようでいらした。まれにみる温厚な方で、そしてじつに飾り気なく正直な方だった。

日本の何名かのフェミニストを扱ったインタビュー映画に出演された際、ご自分を扱った部分が、他の強烈なキャラや派手な経歴をお持ちの方々に比べて、扱いが短いと言って少しばかりしょげておられた。そういうことをじつに自然に率直に口になさり、まったく嫌みのないところが井上先生のお人柄だと思う。井上先生は、まずもって誠実な研究者であられ、最後までその誠実さを貫かれた。

井上先生とご一緒した仕事の一つに、津野海太郎先生の『花森安治伝』のブックトークがある 。井上先生は、津野先生の著作の内容をじつに丁寧にまとめられていた。司会を担当した私は、一切手を抜くことなく学生のレジュメのように年表まで作って本の内容をまとめられた井上先生の真面目さに脱帽した。普通、年齢を重ねて大御所になればそんな面倒な仕事はあまりやりたがらず適当に済ませたりする人が多いと思う。井上先生にはそういう甘えとか手抜きが一切なかった。私が誠実だと言うのは先生のそういうところである。

コロナ禍でお会いできないと思っていたら、いきなり先生の訃報が飛び込んできた。お渡しするつもりのものがあったのにとうとう渡せずじまいになってしまった。どんなにお渡ししたくても、もう先生はおられず、感想を伺うこともできない。井上先生の存在の大きさを改めて痛感している。井上先生、ありがとうございました。

（**宮崎 かすみ**・総合文化学科）

▲『花森安治伝』ブックトーク（2017.12）

Memorial

井上先生と教授会

あの小さな背中に、ヒョウ柄のリュックを背負った井上先生。またどこかでお会い出来そうな気がしてなりません。

井上輝子先生には、先生が人間関係学部長を務められた2003年度から 2006年度までの間、担当事務としてご指導を頂きました。

当時は、人間関係学部からの学部改組に向けた申請作業が喫緊の課題でした。ただ、入職 2 年目だった私には知識も経験も無く、井上先生から見れば、どんなに頼りなかったことかと思います。

けれども、井上先生は決して偉ぶることなく、来る日も来る日も丁寧に「設置届出とは何か」を私に教えてくれました。また、随所にわたって担当事務としての意見を求めてもくれました。こんな若手職員の意見を汲み取ってくれるのかと私は嬉しくなり、必死になって勉強したことを昨日のように思い出します。

準備は念入りに、そして、どんなに議論が白熱しようとも冷静に議事を進め、会議後には 各所にフォローも忘れない。そんな井上先生の立ち振る舞いを 4 年もの間一番近くで見ら れたことはとても貴重で、女性が組織の中で働くとはどういうことかを考えさせられた時間となりました。

あの時、井上先生が自分を信用してくれたこと、そして井上先生のご指導の下、学部改組を乗り切れたことは大きな自信と経験となり、大学職員を続ける上で、何物にも代えがたい財産となっています。

当時のことを振り返れば、色んなエピソードが他にも思い出されます。たとえば、13 時に始まった学部教授会は、長ければ 21 時近くまで及ぶこともありました。頻繁にある長時間会議は過酷で、あまりの長さに会議中に夜食を食べ始めす先生がいらっしゃったり、いちごと練乳が回覧資料と共に回付されたりと、今では考えられない光景が繰り広げられていました。

先生方は空腹を満たしながら会議に参加できたとしても、議事録をとっている職員が、会議中にいちごを食べたり、ましてや練乳をかけるわけにはいきません。目の前を通り過ぎていくいちごを、よほど恨めしく見ていたのでしょう。そんな私を気遣ってか、井上先生はポーチから目薬を出すふりをして、机の下からこっそり飴をくれました。以来、会議が遅くなるたびに、こっそり飴をくれるように。会議時間が短くなることはありませんでしたが、「根回しが大事なのよ」と言っては、ふふふと笑う姿がそこにありました。

オシャレ好きでもあった井上先生は、新しい洋服やアクセサリーを身につけている人を見付けては「それはどこのかしら」とチェックをされていました。井上先生のチェックがいつ入るか分からないので、常に身だしなみに気を遣いました。

仕事には厳しくも職員には対等に接し、時にチャーミングでオシャレが大好きだった井上先生。私が担当を離れた後も、時折、ワインをご一緒し、二人で「女子会」をすることがありました。

今は天国で、どなたと「女子会」をしているのでしょうか？

（**山中 ちひろ**・総務企画部 事業室 総務係）

◀お食事会で（2015.7）

Memorial

井上輝子先生の笑顔の記憶

井上輝子先生とは、実は先生の研究や教務などに関する業務でかかわることはありませんでした。私は入職時に情報センター事務室（現・図書・情報室情報システム係）に所属しており、研究室やジェンダー・フォーラム のパソコン等の機器やネットワークの設定などを何度かお手伝いしたことから、顔を憶えていただき、学内外でお見掛けするとご挨拶やお話をするようになりました。業務とは別に、個人的にジェンダー・フォーラムにも何度かお邪魔したことも記憶に残っています。また、井上先生のゼミ生で、社会人学生をしていたメディアサロンのアルバイトスタッフから、よく井上先生の話題が出ていたことを憶えています。（井上先生の訃報も、そのスタッフが Facebook に投稿していた記事を拝見したのが私にとっての第一報でした。）

井上先生は、私が入職してから数年後に定年で退職され名誉教授となられましたが、退職後もぱいでいあ講師をしてくださっていたことや、ジェンダー・フォーラムのイベントなどに関わってくださっていたことから、学内でしばしばお見掛けしました。さらに、現在の部署である入試広報室への異動後には、同じフロアの企画室がぱいでいあ講座の管理をしていたことから、定期的にお元気な姿を拝見していました。私が直接知る名誉教授の中でも、退職後も最も積極的に大学に関わってくださる先生のお一人であり、年齢を重ねても、精力的に活動なさっているご様子を見習いたいと思っていたものです。

井上先生には、いつお会いしてもにっこりと優しい笑顔で応えてくださいました。また、ご挨拶だけではなく「あら、お久し振りね。元気？」「今はどこの部署なの？」「身体に気を付けてがんばってね」などと言葉を重ねてくださったことが、今でもはっきりと思いだされます。

直接そのようにお呼びすることはなかったのですが、「井上先生」よりも「輝子先生」という印象が残っています。輝子先生、いつもお優しいお言葉をありがとうございました。天国ではどうぞ穏やかな日々をお過ごしください。また、私の不勉強で、研究の内容は生前あまりお伺いできませんでしたが、私がいつかそちらに行ったらぜひ、いろいろご教授くださいね。

（**瓜生 こずえ**・入試広報室）

Memorial

井上輝子先生を偲んで

井上先生との出会いはプロゼミの担当教員として始まります。今となってはシラバスの内容は覚えていませんが、確か「少女」のキーワードが入っていて私の中では一択で決めたプロゼミでした。緊張しながらの顔合わせでは、にぎやかな学生たちの中にあって先生はむしろ控えめで、とても穏やかで優しい雰囲気と話し方が印象的でした。

その後 4 年間、日常生活でのモヤモヤについて女性学という理論的な学問として学び、ゼミの主査までお世話になり卒業しますが、常に声を荒げることなく話を聞き、丁寧な態度で接していたことが思い出されます。また、いつも授業には遅れてきてのんびりした先生だな〜、なんて思っていました。(後に、移動中に会う人にも丁寧に対応する人柄故と知ります)

しかし、先生とのご縁は続き、たまたま大学のイベントでお会いしたのがきっかけとなって、2001年から 2008年まではジェンダー・フリースペース（現ジェンダー・フォーラム）の立ち上げスタッフとしてご一緒することになります。途中からは ＴＡとして講義のお手伝いと開始された大学院ゼミへも参加させていただき、ジェンダー / フェミニズム についての多くの学びと様々な出会いの機会をいただきました。その後も ＧＦ読書会に参加させていただいたり、フィールドワークや食事会に参加したりと、色々とご一緒させていただいたのは、振り返るととても楽しく貴重な思い出です。

「小さな実験大学」という開学理念の下、日本で最初となる『女性学』と冠した講義を立ち上げ、女性として女性のために女性について研究・発信してこられた井上先生から直接学べたこと。晩年には、大学内に学部学年の垣根を超えて、ジェンダーについて広く開かれた場を設けて根付かせたいとジェンダー・フリースペースに注力されておられたこと。大学内にとどまらず「ぱいでいあ」や川崎市行政においても一貫して男女平等に向け変わらぬ情熱を傾けておられた姿勢に、井上先生のしなやかさ、粘り強さを知ると同時に、誰に対しても常に丁寧に対応する人柄に接するにつれ、人生のメンターとして多くのことを学びました。

もうお会いして、いつものように優しく微笑みながら話を聞いてもらうことはできないのかと思うと、いまだに涙が止まりません。思い返せばお世話になるばかりで、何もお返しできず恥ずかしい限りですが、言葉では言い尽くせない感謝の気持ちでいっぱいです。

井上先生、どうもありがとうございました。

（**境 磯乃**・渋谷男女平等・ダイバーシティセンター）

▲ GF読書会で（2016.冬）

▲ 銀座へのフィールドワーク（2017.秋）

2021年度　行事報告

GF event

映画で考える ジェンダーと人権

2021年10月28日、共通教養科目「法と人権」（徳永貴志教授担当）との共催で、志田陽子先生（武蔵野美術大学教授）の講演会を開催した。ジェンダー・フォーラムでの志田先生の講演は 2017年以来２回目となる。今回の講座は、『映画で学ぶ憲法Ⅱ』（法律文化社 2021）で紹介された映画のうち、ジェンダー的視点を持つ作品を取りあげる形で進められた。また、憲法学的な視点を持って社会を知るためのアシストとして映画を観ることへのいざないでもあった。ジェンダー理論は、性別間の格差や差別にとどまらず、差別問題一般に応用できる。こうした基本的視点を持って志田先生は映画をひもといていった。

志田先生が紹介された映画は社会の実態を生々しく描くものばかりであり、それらの作中には社会の中で劣位に置かれたことで苦しむ人々が登場する。志田先生は、取りあげた映画を 3 つの視点に区分して分析された。第一に、私たちの社会は「公共」と「私的庶務」の担い手をジェンダーで分けていないか、つまり、ジェンダーステレオタイプと公私の視点である。第二に、女性や特定人種・民族の能力に対する偏見から彼らを知的領域から排除していないか、つまり、「知の仮定」という視点である。第三に、病者をジェンダー化していないか、看護者・介護者をジェンダーステレオタイプ化していないか、そして、ジェンダーステレオタイプにあわない人を「病者」（特に精神病・人格障害者）とみなしていないか、つまり、病気とジェンダーの視点である。

◀『映画で学ぶ憲法Ⅱ』

とかく映画は、映像表現、ストーリー展開、俳優の演技などに対して、特定の視点を置きがちだが、「法の下の平等」、「自己決定権」、「幸福追求権」、「表現の自由」などの憲法学のフィルターを通して作品を鑑賞すると、それらの作品は現実社会の写し鏡であることに気づかされる。映像作品にはフィクションの中に、現実社会についての作者の解釈や視点が織り込まれており、それに気づくことで対話のきっかけを見出そうというのが志田先生の提案である。

筆者は、講座で取りあげられた作品を全て観た。例えば、「わたしを離さないで」（2010 英米合作）からは、身体と存在を軽いものとして扱われることの悲しさや絶望感、他者のためにだけ存在させられることの理不尽さが、美しい映像とともに強く伝わってきた。医療の発達により、生命の価値とジェンダーをめぐる新たな問題が起きており、「私の中のあなた」（2009 米）でも、医療倫理と人権の問題が扱われている。移植される側にとってはメリットの大きい臓器移植技術も、臓器提供する側という弱者を作り出しかねない。生命に対して自己決定権がある者とない者との格差は紛れもないジェンダー問題であるし、「持って生まれた役割」、「美徳」といった言説を用いて家事労働や低賃金労働を特定の人々が自発的に引き受けるよう仕向けることもジェンダーに通ずる考え方である、と志田先生は指摘されていた。誰かの何かの目的のために利用される人間を区分することは重大な人権侵害であるにも関わらず、現実の社会にこうした例は枚挙にいとまがない。

他方、紹介された映画の中でも「未来を花束にして」（2015 英）、「グローリー・明日への行進」（2015 米）、「ミルク」（2008 米）では同じ境遇の人々が、そして「フィラデルフィア」（1993 米）や「黒い司法」（2019 米）ではマイノリティのバディが協力して困難に立ち向かう姿が多く描かれていた。幸福の追求には、寄り添う態度や思いやりの心、そして人々の連帯が必要不可欠であることを映画は教えてくれる。多様性と人権を基本とする社会は、偏見の克服という課題を抱えている。映画を複眼的視点でみることによって、さまざまな立場の人々の悲しみや痛みに寄り添う想像力を働かせることが出来るということを、今回の講座を通じて学ぶことができたのではないかと思う。

志田先生の講演内容を本稿で紹介し尽くすことはできないので、ジェンダー・フォーラムのＨＰで公開されているオンライン動画をぜひご覧いただきたい。

（**阿野 理香**・GF スタッフ）
（**徳永 貴志**・経済学科）

▲ 講演会の様子(向かって左側が志田陽子先生)

Free space

2021年度の ジェンダー・フリースペース

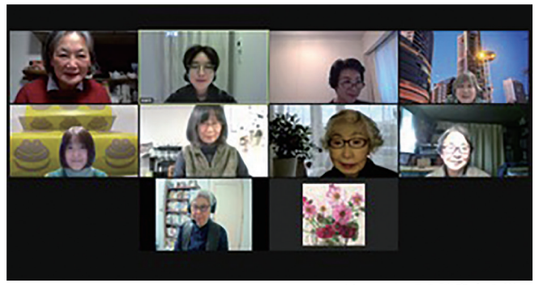
ジェンダー・フリースペース（ＧＦＳ）は、今年もコロナ禍に翻弄された１年でした。大学のコロナ対応の行動制限レベルに合わせたフレキシブルな開室を試行錯誤し、緊急事態宣言下では、リモートによる開室を行いました。開室が、悪影響を及ぼしてしまうのではと、かなり心配でした。しかし、保護シートに覆われた環境での短時間の開室にもかかわらず、多くの学生の来室があり、どんなに厳しい時にでも、フリースペースの存在価値はあるのだと再認識しました。コロナに立ち向かう勇気を与えてもらったような気がしています。

さて、2021年度は「ＧＦ読書会」に大きな悲しい出来事がありました。この読書会を立ち上げ、10年間にわたり主宰されてきた井上輝子名誉教授が、2021年８月10日に急逝されたのです。井上先生は前期終了時の ７月には後期の計画のお話をされており、秋には再会できるものだと信じていたところでの突然の訃報でした。読書会のみなさんは、悲しみにくれ大きなショックを受けておられましたが、しばらくしてメンバーによる今後についての話し合いがもたれました。その結果、井上先生のご遺志を引き継ぎ、これからも読書会を続けていくこととなり、急遽計画を変更し、後期は井上先生の名著『新・女性学への招待』（2011）を輪読しました。

井上先生のお話を直接お聞きする事は叶わなくなりましたが、しばらくは先生のお書きになったものを読むことで、そのお考えに触れていく予定です。「これからも読書会は社会人のための学習と研究の場にしたいね」とメンバーのみなさんとお話をしています。ジェンダー・フォーラムは、この社会人の活動を引き続き応援していく覚悟です。

皆を苦しめ続ける鬱屈したコロナ禍が１日も早く終息し、ＧＦＳが大きく息を吹き返せる日が来ることを期待してやみません。

（**阿野 理香**・GF スタッフ）


▲ リモートでの読書会の様子

Event

2021年度 デートＤＶ防止啓発講座

2021年11月18日（木）、共通教養科目「法と人権」（徳永貴志先生担当）の授業内で、デートＤＶ防止啓発講座を開催しました（町田市男女平等推進センター主催・和光大学ジェンダー・フォーラム共催）。NPO法人レジリエンスの西山さつきさんを講師としてお迎えしての Zoom講座でした。

西山さんのお話から、暴力被害･加害のメカニズムや影響、被害からの回復の道筋などについて、科学的な解明がさらに進んでいることを知りました。また、ストレスケア、トラウマケアのためのエクササイズをご紹介いただき、実践的な知識を得ることもできました。

（**杉浦 郁子**・人間科学科）

＜受講した学生のコメントを紹介します＞

自分が講義を受けて印象に残った部分は、人間関係で負う傷は人間関係で癒すことができると言うことです。自身がデート DV のような行為をされている最中は誰でも悪循環に陥ってしまい自覚することが難しいです。講義内容でのトラウマティックボンディングのように、別れたくないと思ってしまい依存してしまうこともあります。自分で自分の置かれている状況を客観的に見ることができなくなることは非常に危ないことですが、そこで友人や家族が近い存在としていることでこんなにも環境は変えることができるのだと思いました。自分が抱いている苦痛やそれでもなぜか離れることができない、どうすれば良いのか分からないなど不安を抱いている人は意外にも身近にいるように思います。そんな時に寄り添い、話を聞いて「あなたは悪くないよ」とアドバイスや相談に乗ることで、相手も自分の状況を見返す何かの機会になるかもしれません。自分もこの講義を振り返り、友人などの相談や恋人関係の不満などを受けた際は相手に寄り添えるようになりたいと思いました。

（**嶋岡 桃子**・心理教育学科・3年）

授業の冒頭で先生が話されていた「対立を解決する手段はいくらでもあり、その中で暴力という手段を選ばないことが大切だ」という意見に共感した。暴力とは人間に対し心身問わず深い傷を負わせるものであるので、互いに納得のいく方法を思考錯誤しながら、暴力以外の手段で問題解決に臨むのが望ましいと改めて考えた。また「問題の原因の究明と暴力を振るうことは別軸の話だ」という意見にも共感した。

恋愛に関して、私は「他者に暴力を振るうことがかっこいい恋愛だと伝えているかのような映画」を知っているのだが、そうした映画やメディアの影響でデートDVが増えているのではないかと懸念した。DVを減らす、つまり「暴力を振るっていい」という認識をなくすには、学校や親の教育が大切だと考えた。また世の中の DV問題について、友人などの身近な人達と意見を交換し合うことも、重要であると感じた。

（**鈴木 光**・総合文化学科・1年）

GF event

卒論発表会

今年度の卒論発表会は、2022年1月19日（水）、Zoomミーティングの型式で開催されました。報告者と卒業論文のタイトルは以下のとおりです。伏見圭生さん（総合文化学科）「男性同性愛者をめぐる世代間のコミュニティ認識 ～ゲイコミュニティの歴史と社会状況～」、小林真実子さん（現代社会学科）「女性プレイヤーのコンピューターゲームプレイ継続とキャラクター描写 ―ゲームによるジェンダー再生産に注目して―」、種市愛理さん（心理教育学科幼児教育課程）「保育者のジェンダー観と子どものジェンダー規範形成との関係 ―保育者へのアンケート調査より―」、田中日菜さん（総合文化学科）「映画におけるレズビアン表象 ―女性同士の愛は『普遍的な愛』か？―」。いずれも本人の努力と指導された先生のお骨折りがうかがわれる労作です。質疑応答も活発に行われ、有意義な発表会となりました。もっとも、不勉強な筆者は、深い議論には追いついていけず、ただ漠然と各論文における〈時間〉について考えていました。

伏見さんの論文は、キリスト教社会における罪としての同性愛、米国のゲイ解放運動、近代化によって変化した日本におけるゲイの地位など、中長期的な歴史に言及したうえで、新宿二丁目というゲイコミュニティを分析するものです。アンケート調査も行い、地区全体が観光化され、ゲイの人々が足を運びにくくなっているという短期的な変化＝ジレンマの実相が明らかにされています。長短の時間軸を設定し、当事者に対する調査を組み合わせ、また新宿二丁目のこれからのありようも構想する厚みのある論文でした。

小林さんの論文でも、さまざまなプラットフォームのさまざまなゲームが、その黎明期において男性向けのものであり、次第に、ゆがみははらみつつも、女性キャラクターが主役に据えられるようになってもきたという時間の流れが説明されています。さらに、プレイヤーについても、このようなマクロなトレンドとは別に、子供から大人という時間の流れにともなって、とくに女性がゲームをしなくなるというミクロな時間の流れがあると指摘しています。二つの時間の流れを並置する秀逸な論文でした。

種市さんの論文は、保育現場におけるジェンダーにかかわるステレオタイプの再生産に関し、保育者のジェンダー規範が子供たちに与える影響を分析しています。発表を聞き、子供たちの日々の時間の流れはとても目まぐるしく濃密に進んでいるのではないかということに想到しました。毎日、たくさんのことを吸収していく子供の成長は非常に速く、そのような時期に、お父さん座りやお母さん座りといったことばが用いられ、性別に基づいて行動が促されていくことは、その後にとても大きな影響を与えることに気づかされました。

田中さんの論文では、映画の筋書や配給会社の広報に見られるレズビアンの普遍化が欺瞞であるという指摘が印象に残りました。異性愛者が「運命の人」に出会い、同性愛者としてのアイデンティティを得るという筋立ては、事実としてその種の個人史があったとしても、居心地が悪く、冒頭のシーンから登場人物がレズビアンであるという映画がもっと増えてほしいという主張です。時間は流れていきますが、どこからが自分なのかという起点をみずから設定する意志の尊重が偏見の解消につながるとの考え方なのだと理解しました。

以上、繰り返しになりますが、それぞれの卒業論文の概要を正確にまとめることは手にあまり、発表を聞きながら、皆さんの議論のかたわらで考えていたことをまとめました。各論文の内容をより詳しく知りたい場合は、いずれも GFS で閲覧が可能になる予定ですので、ぜひ手にとってみてください。

などと考えていたところ、GF スタッフの阿野さんから、発表者のうちの二人は、1 年生のときから GFS に顔を出しており、4 年生になって、立派な卒業論文を書きあげることができ、とても嬉しかったというお話を聞きました。4 人の報告者それぞれが積み重ねてきた 4 年間の成長という時間の流れが最後に交錯したところに立ち会えたことは自分も嬉しく思います。

（**杉本 昌昭**・経営学科）

▲ 卒論発表会の様子

※本文中の年表について
「最終講義草稿『女性学と私―40 年の歩みから』」和光大学現代人間学部現代社会学科紀要，『日本のフェミニズム―150 年の人と思想』（2021 有斐閣）、井上輝子先生ご本人の生前の語りや記録，取材等から抽出した。